

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平11-305007

(43) 公開日 平成11年(1999)11月5日

(51) Int.Cl.⁶

識別記号

F I

G 0 2 B 1/11

G 0 2 B 1/10

A

B 3 2 B 7/02

1 0 3

B 3 2 B 7/02

1 0 3

G 0 2 B 5/30

G 0 2 B 5/30

G 0 2 F 1/1335

5 1 0

G 0 2 F 1/1335

5 1 0

G 0 9 F 9/00

3 1 8

G 0 9 F 9/00

3 1 8 A

審査請求 未請求 請求項の数 6 O L (全 14 頁) 最終頁に続く

(21) 出願番号

特願平10-109690

(22) 出願日

平成10年(1998)4月20日

(71) 出願人 000153591

株式会社巴川製紙所

東京都中央区京橋1丁目5番15号

(72) 発明者 村田 力

静岡県静岡市用宗巴町3番1号 株式会社

巴川製紙所情報メディア事業部内

(72) 発明者 大石 和也

静岡県静岡市用宗巴町3番1号 株式会社

巴川製紙所情報メディア事業部内

(72) 発明者 松永 康弘

静岡県静岡市用宗巴町3番1号 株式会社

巴川製紙所情報メディア事業部内

(74) 代理人 弁理士 末成 幹生

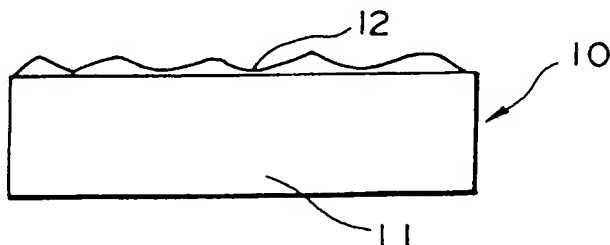
最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 反射防止材料及びそれを用いた偏光フィルム

(57) 【要約】

【課題】 反射率を低減してディスプレイへの太陽光及び蛍光灯等の外部光の映り込みを防止し、画像コントラストを低下させることなく、ギラツキ等のない鮮明な画像を得ることができ、光学的に安定で優れた耐摩耗性、耐薬品性を示す反射防止材料を提供する。

【解決手段】 透明基体11の片面もしくは両面に、直接或は他の層を介してハードコート層12を設け、このハードコート層12の表面にハードコート層12の屈折率よりも低い屈折率を有する低屈折率層を設けた反射防止材料であり、ハードコート層12は、硫黄、芳香族化合物またはハロゲンを含む樹脂の少なくともいずれか一種を含有し、かつ、透明基体11およびハードコート層12の屈折率の差が0.1以下である。



【特許請求の範囲】

【請求項 1】 透明基体の片面もしくは両面に、直接または他の層を介してハードコート層を設け、このハードコート層の表面にハードコート層の屈折率よりも低い屈折率を有する低屈折率層を設けた反射防止材料において、上記ハードコート層は、硫黄、芳香族化合物またはハロゲンを含む樹脂の少なくともいずれか一種を含有し、かつ、上記透明基体およびハードコート層の屈折率の差は 0. 2 以内であることを特徴とする反射防止材料。

【請求項 2】 前記透明基体およびハードコート層の屈折率は 1. 6 ~ 1. 7 であり、かつ、上記透明基体のハードコート層側の面は、表面改質処理が施されていることを特徴とする請求項 1 に記載の反射防止材料。

【請求項 3】 前記低屈折率層の屈折率が 1. 2 0 ~ 1. 4 5 であり、かつ、前記透明基体がポリエチレンテレフタレートであることを特徴とする請求項 1 または 2 に記載の反射防止材料。

【請求項 4】 前記ハードコート層が無機系フィラーを含有することを特徴とする請求項 1 ~ 3 のいずれかに記載の反射防止材料。

【請求項 5】 前記無機系フィラーの粒径 D は、 $0. 5 \mu m \leq D \leq 6. 0 \mu m$ の範囲の粒子が 6 0 重量%以上、 $6. 0 \mu m < D \leq 1 0. 0 \mu m$ の範囲の粒子が 2 0 重量%未満、 $1 0. 0 \mu m < D \leq 1 5. 0 \mu m$ の範囲の粒子が 5 重量%以下、さらに、 $1 5 \mu m$ より大きい粒子が 1. 0 重量%以下である粒度分布を有することを特徴とする請求項 4 に記載の反射防止材料。

【請求項 6】 請求項 1 ~ 5 のいずれかに記載の反射防止材料の前記透明基体の前記ハードコート層および前記低屈折率層が設けられていない他方の面に、偏光基体を介して保護材を積層したことを特徴とする偏光フィルム。

【発明の詳細な説明】

【0 0 0 1】

【産業上の利用分野】 本発明は液晶ディスプレイ (LCD)、プラズマディスプレイ (PDP)、CRT、EL 等の画像表示体等に好適に用いられ、特に、画像部の防汚性、反射防止、耐薬品性、耐摩耗性に優れ、とりわけ反射防止性に優れた反射防止材料及びそれを使用した偏光フィルムに関するものである。

【0 0 0 2】

【従来の技術】 LCD、PDP、CRT、EL に代表される画像表示装置 (以下、これを「ディスプレイ」という。) は、テレビやコンピューターを始めとして、様々な分野で繁用されており、目覚ましい発展を遂げている。このディスプレイの開発は、当初においてはカラー化が開発のキーワードであったが、最近ではハイビジョンがキーワードのひとつになり、画像の高精細化、高画質化、さらには低消費電力化等へ努力が傾注されている。マンマシンインターフェイスの重要な役割を担うこれ

らディスプレイは今後、マルチメディア時代の到来と共に一層の普及が予想され、特に、携帯電話、PHS、その他各種携帯端末用としての普及が著しく拡大するものと予測される。

【0 0 0 3】 携帯端末用ディスプレイとしては、軽量、コンパクト、汎用性等の特徴を有する LCD が市場を独占するものと考えられているが、これらの携帯端末にはタッチパネルを搭載し、プラスチックのペンや指で直接触れて操作するものが主流になってきている。そのため、ディスプレイ表面への耐摩耗性、耐薬品性、汚れ防止に対する要求が高まっている。また、これらの機器を屋外での使用も含めた比較的明るいところで使用する場合の太陽光や蛍光等の外部光のディスプレイへの映り込みを防止すること、すなわち反射防止に対する要求も強くなっている。これらの要求は、現在、携帯端末機器に限らず、小型から大型に至る様々なディスプレイに波及している。

【0 0 0 4】 反射防止に関しては、従来、磨りガラスのように、光を散乱もしくは拡散させて像をボカス手法が一般的に行われている。光を散乱もしくは拡散させるためには、光の入射面を粗面化することが基本となっており、この粗面化処理には、サンドブラスト法やエンボス法等により基材表面を直接粗面化する方法、基材表面にフィラーを含有させたハードコート層を設ける方法及び基材表面に海島構造による多孔質膜を形成する方法等が採用されている。

【0 0 0 5】 基材表面にフィラーを含有させたハードコート層を設ける方法は、フィラーの粒径により粗面化面の凹凸の大きさを比較的容易にコントロールでき、かつ製造が容易である等の利点から、現在、好んで用いられている。塗工剤に使用する樹脂としては、透過性、耐熱性、耐摩耗性、耐薬品性等に優れたものが望ましいが、基材が耐熱性に乏しい高透明なプラスチックフィルムである場合が多いことから、UV硬化型樹脂が好んで使用されている。その例として、UV硬化型樹脂とシリカ顔料を構成要素とする特開平 1 - 1 0 5 7 3 8 や特開平 5 - 1 6 2 2 6 1 などが報告されている。

【0 0 0 6】

【発明が解決しようとする課題】 ところで、基材の材料としては、ポリエチレンテレフタレートやポリカーボネートが用いられることがあるが、これらはいずれも 1. 6 5 程度という高い屈折率を有している。ところが、従来の反射防止材料のハードコート層に用いられている樹脂は、UV硬化型、EB硬化型あるいは熱硬化型の樹脂にしるそのほとんどがアクリレート系樹脂であり、屈折率は 1. 5 0 ~ 1. 5 5 程度である。このように、基材の屈折率の方がハードコート層の屈折率よりも高いため、それらの界面で入射光の一部が反射して反射率が上昇するという問題があった。さらに、基材とハードコート層の反射率が異なるために、それらの界面で入射光が

干渉し、その結果、反射率が入射光のスペクトルに応じて波打つように変化する。つまり、入射光のスペクトルによっては反射率の高い部分が生じるため、反射防止効果が実質的に損なわれていた。

【0007】また、上記提案によるシリカ顔料は、吸油性が高いために、ハードコート層とした場合は、指紋等の油分を吸収し易くなるため、汚れやすいという欠点を有していた。さらに、この汚れはアルコールなどの溶媒を染み込ませた布で拭いても取れにくい上に、シリカがハードコート層表面に鋭利に突き出た構成を呈しているため、突き出たシリカの先端部に拭き取った布の繊維が付着し、白くなってディスプレイの画像コントラストが低下するという問題があった。

【0008】反射を防止する他の方法としては、屈折率の高い材料と低い材料を交互に積層し、多層化（マルチコート）することで、表面の反射が抑えられ、良好な反射防止効果を得ることが知られている。通常、 SiO_2 に代表される低屈折率材料と、 TiO_2 、 ZrO_2 等の高屈折率材料を交互に蒸着等により成膜する気相法や、ゾルゲル法等により形成される。これらの層をシリカを含有する上記ハードコート層上に設ける提案もなされているが、このような技術においても汚れが拭き取りにくいという上記と同様の問題を抱えていた。その原因は、シリカがハードコート層の表面から鋭利に突き出ているため、その形状に倣ってマルチコート層の低屈折率層の凹凸もシャープとなるために上述したと同じ問題が生じるとともに、シリカの粒子の一部が低屈折率層を突き抜けて指紋等の油分を吸収し易くなるためである。

【0009】しかも、上述のマルチコートは、蒸着等の気相法による場合には、大面積の加工に不向きで、加工装置が高いこと、ゾルゲル法による場合は、塗布、焼成を繰り返すこと等の理由から製造コストがかかり経済性に問題がある上、表面が紫や緑系統の色を呈しているため、マルチコートがないものより汚れが目立つことが大きな問題となっていた。一方、このような汚れの発生を防止するために、上記ハードコート層上にフッ素系材料をコーティング等により設ける提案もなされているが、ハードコート層の影響が大きく問題を解決するには至っていない。

【0010】また、ディスプレイの解像度が向上するに伴い、上記ハードコート層の凹凸の高さや間隔にも緻密化が要求されるようになってきた。画像の高精細化は、主に画像ドットの高密度化によるが、凹凸の間隔がこの画像ドットのピッチより小さい場合は良いが、大きい場合は干渉によるギラツキが発生する。反射防止性が良好で、ギラツキがない鮮明な画像を得るためには、まず、この凹凸の高さ及び間隔を、小さくかつバラツキがないようコントロールしなければならない。

【0011】しかしながら、UV硬化型樹脂とシリカ顔料からなるハードコート層の分散性は必ずしも十分とは

いえない上に、UV硬化を行うまでのハードコート層は、低粘度の液状態を呈しているため、塗料を基材に塗布してからUVを照射するまでの間に、ハードコート層中のフィラーどうしが互いに付着し、凝集（オレンジピール）するという問題を有していた。特に、ハードコート層表面の凹凸を緻密化する目的でフィラーの含有量を増加させたり、ハードコート層の厚さをコントロールするためにハードコート層の塗料を溶剤等で希釈する場合は特に顕著であった。

【0012】本発明は、従来技術における上記した実情に鑑みてなされたもので、反射率を低減してディスプレイへの太陽光及び蛍光灯等の外部光の映り込みを防止し、画像コントラストを低下させることなく、ギラツキ等のない鮮明な画像を得ることができ、光学的に安定で優れた耐磨耗性、耐薬品性を示すことは勿論のこと、優れた耐汚染性を示す反射防止材料を提供することを目的としている。また、本発明は、上記反射防止材料を使用した偏光フィルムを提供することも目的としており、これにより、特に、フルカラー液晶ディスプレイ等の性能を大幅に向上させることを目的としている。

【0013】

【課題を解決するための手段】（1）反射防止材料の内容

本発明者は、透明基体とハードコート層の界面での入射光の反射と干渉を抑制して低屈折率層の良好な反射防止機能を達成するために、ハードコート層の屈折率を高めることを検討した。そのために、ハードコート層に、硫黄、芳香族化合物またはハロゲンを含む樹脂の少なくともいずれか一種を含有させた。また、透明基体とハードコート層の屈折率を定量的に解析した結果、両者の差が0.1以下であれば反射防止材料の反射率を充分なレベルまで低減できることを見いだした。

【0014】本発明は上記知見に基づいてなされたもので、透明基体の片面もしくは両面に、直接或は他の層を介してハードコート層を設け、このハードコート層の表面にハードコート層の屈折率よりも低い屈折率を有する低屈折率層を設けた反射防止材料において、ハードコート層に、硫黄、芳香族化合物またはハロゲンを含む樹脂の少なくともいずれか一種を含有させ、かつ、透明基体およびハードコート層の屈折率の差を0.1以下、好ましくは0.05以下としたことを特徴としている。

【0015】上記構成の反射防止材料にあつては、ハードコート層の屈折率を高めることができるので、低屈折率層との屈折率の差を容易に適切に設定することができると共に、ハードコート層の屈折率を透明基体の屈折率に近づけることができる。そして、透明基体とハードコート層の屈折率の差を0.1以下としているので、両者の界面での入射光の反射と干渉が抑制され、ディスプレイへの外部光の写り込みを防止することができる。本発明者の検討によれば、屈折率の差が0.05以下である

と極めて良好な結果が得られることが明らかにされている。また、ハードコート層の屈折率を低屈折率層の屈折率に対して高くすることができるので、反射防止効果をさらに高めることが可能となる。

【0016】すなわち、公知の文献（サイエンスライブラリ、物理学9「光学」70～72頁）によれば、入射光が低屈折率層に垂直に入射する場合に、低屈折率層が光を反射せず、かつ100%透過するための条件は次の関係式を満たせば良いとされている。なお、式中 N_o は低屈折率層の屈折率、 N_h はハードコート層の屈折率、 h は低屈折率層の厚さ、 λ_o は光の波長を示す。

【0017】

$$【数1】 N_o = N_h \cdot \lambda_o / 4 \quad \text{式(1)}$$

$$N_o \cdot h = \lambda_o / 4 \quad \text{式(2)}$$

【0018】式(1)から明らかなように、ハードコート層の屈折率は、低屈折率層の屈折率の2乗である必要がある。たとえば、低屈折率層の屈折率が1.30であれば、ハードコート層の屈折率は1.69にする必要がある。この点、本発明によれば、ハードコート層にそのような高い屈折率を付与することができるので、低屈折率層での反射率を大幅に低減することができる。

【0019】

【発明の実施の形態】以下、本発明のより好適な実施の形態について詳細に説明する。

A. 透明基体

本発明の反射防止材料に使用する透明基体としては、公知の透明なフィルム、ガラス等を使用することができる。その具体例としては、ポリエチレンテレフタレート(PET)、トリアセチルセルロース(TAC)、ポリアリレート、ポリイミド、ポリエーテル、ポリカーボネート、ポリスルホン、ポリエーテルスルホン、セロファン、芳香族ポリアミド、ポリエチレン、ポリプロピレン、ポリビニルアルコール等の各種樹脂フィルム及び石英ガラス、ソーダガラス等のガラス基材等を好適に使用することができる。低屈折率層での反射率を低減するためには、ハードコート層の屈折率が高い方が望ましく、1.6～1.7が好適である。よって、透明基体も屈折率の高いPET、ポリカーボネートあるいは1.65程度の屈折率を有するプラスチックが好適であり、とりわけ、安価で光学的特性に優れたPETが良い。

【0020】これら透明基体の透明性は高いもの程良好であるが、光線透過率(JIS C-6714)としては80%以上、より好ましくは90%以上が良い。また、その透明基体を小型軽量の液晶ディスプレイに用いる場合には、透明基体はフィルムであることがより好ましい。透明基体の厚さは、軽量化の観点から薄いほうが望ましいが、その生産性を考慮すると、 $1\mu\sim 700\mu\text{m}$ の範囲のもの、好ましくは $25\sim 250\mu\text{m}$ を使用することが好適である。

【0021】また、本発明では、透明基体に、アルカリ

処理、コロナ処理、プラズマ処理、フッ素処理、スパッタ処理等の表面処理や、界面活性剤、シランカップリング剤等の塗布、あるいはSi蒸着などの表面改質処理を行うことが望ましい。すなわち、本発明のような芳香族化合物等を含有する樹脂は屈折率が高いが、そのような樹脂をハードコート層に含有させると、樹脂が均一に分散しないために反射率の高い部分が生じてしまう。そこで、上記のような表面改質処理を行うことにより、ハードコート層と透明基体との密着性を向上させることができるのは勿論のこと、ハードコート層に含有させた高屈折率の樹脂を均一に分散させることができ、所望の均一な屈折率を得ることができる。

【0022】また、透明基体の表面には、ディスプレイ表面に静電的に付着するホコリ等の汚れを防止するために帯電防止層を設けても良い。帯電防止層は、アルミ、錫等の金属、ITO等の金属酸化膜を蒸着、スパッタ等で極めて薄く設ける方法、アルミ、錫等の金属微粒子やウイスキー、酸化錫等の金属酸化物にアンチモン等をドーパした微粒子やウイスキー、7, 7, 8, 8-テトラシアノキノジメタンと金属イオンや有機カチオンなどの電子供与体(ドナー)との間でできた電荷移動錯体をファイナライズしたもの等をポリエステル樹脂、アクリル樹脂、エポキシ樹脂等に分散し、ソルベントコーティング等により設ける方法、ポリピロール、ポリアニリン等にカンファースルホン酸等をドーパしたものをソルベントコーティング等により設ける方法等により設けることができる。帯電防止層の透過率は光学用途の場合、80%以上が好ましい。

【0023】B. ハードコート層

次に本発明におけるハードコート層について説明する。本発明のハードコート層を構成する樹脂としては、硫黄、芳香族化合物またはハロゲンを含む樹脂の少なくともいずれか一種を含有する樹脂が用いられる。また、そのような樹脂は、ハードコート層の屈折率、硬度を調整するために適宜組み合わせ用いられる。ハードコート層の好適な屈折率の範囲は、1.60～1.70である。

【0024】また、ハードコート層には、放射線、熱の何れかもしくは組み合わせにより硬化する樹脂を含有させることができる。放射線硬化型樹脂としては、アクリロイル基、メタアクリロイル基、アクリロイルオキシ基、メタアクリロイルオキシ基等重合性不飽和結合を有するモノマー、オリゴマー、プレポリマーを適宜混合した組成物が用いられる。モノマーの例としては、スチレン、アクリル酸メチル、メチルメタクリレート、メトキシポリエチレンメタクリレート、シクロヘキシルメタクリレート、フェノキシエチルメタクリレート、エチレングリコールジメタクリレート、ジペンタエリスリトールヘキサアクリレート、トリメチロールプロパントリメタクリレート等を挙げることができる。オリゴマー、プレ

ポリマーとしては、ポリエステルアクリレート、ポリウレタンアクリレート、エポキシアクリレート、ポリエーテルアクリレート、アルキッドアクリレート、メラミンアクリレート、シリコンアクリレート等のアクリレート、不飽和ポリエステル、エポキシ系化合物等を挙げることができる。これらは単独、もしくは複数混合して使用しても良い。モノマーは硬化膜の可撓性が要求される場合は少な目にし、さらに架橋密度を低くするためには、1官能、2官能のアクリレート系モノマーを使用することが好ましく、逆に、硬化膜に耐熱性、耐摩耗性、耐溶剤性等過酷な耐久性を要求される場合は、モノマーの量を増やし、3官能以上のアクリレート系モノマーを使用することが好ましい。

【0025】上記のような放射線硬化型樹脂を硬化するには、例えば紫外線、電子線、X線などの放射線を照射すれば良いが、必要に応じて適宜重合開始剤を添加することができる。なお、紫外線により硬化させる場合は、光重合開始剤を添加する必要がある。光重合開始剤としては、ジエトキシアセトフェノン、2-ヒドロキシ-2-メチル-1-フェニルプロパン-1-オン、ベンジルジメチルケタール、1-ヒドロキシシクロヘキシルフェニルケトン、2-メチル-2-モルホリノ(4-チオメチルフェニル)プロパン-1-オン等のアセトフェノン類、ベンゾインメチルエーテル、ベンゾインエチルエーテル、ベンゾインイソプロピルエーテル、ベンゾインイソブチルエーテル等のベンゾインエーテル類、ベンゾフェノン、o-ベンゾイル安息香酸メチル、4-フェニルベンゾフェノン、4-ベンゾイル4'-メチルジフェニルサルファイド、4-ベンゾイル-N,N-ジメチル-N-[2-(1-オキソ-2-プロペニルオキシ)エチル]ベンゼンメタナミニウムプロミド、(4-ベンゾイルベンジル)トリメチルアンモニウムクロリド等のベンゾフェノン類、2,4ジエチルチオキサントン、1-クロロ-4-ジクロロチオキサントン等のチオキサントン類、2,4,6トリメチルベンゾイルジフェニルベンゾイルオキサイド等を挙げることができる。これらは単独もしくは複数、混合して使用することができる。また、促進剤(増感剤)として、N,N-ジメチルパラトルイジン、4,4'-ジエチルアミノベンゾフェノン等アミン系化合物を混合し、使用することもできる。光重合開始剤の含有量としては、放射線硬化型樹脂に対し、0.1~10重量%の範囲が良い。この範囲より多くても少なくとも効果が悪くなる。

10

20

30

40

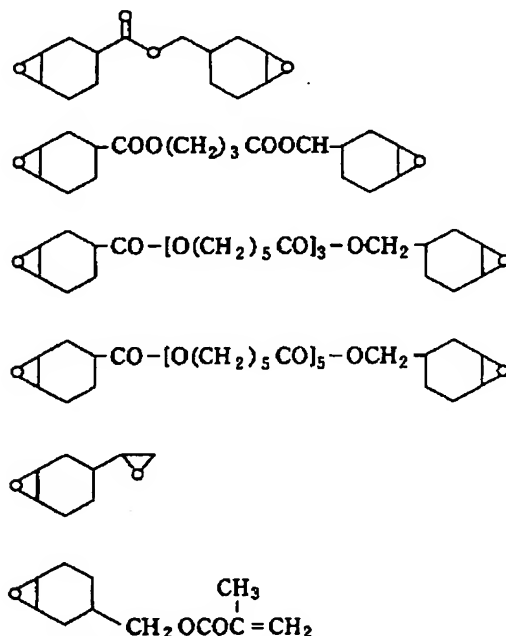
【0026】本発明においては、放射線硬化型樹脂として紫外線により硬化するエポキシ系化合物を用い、かつ、光重合開始剤として、カチオン重合開始剤を少なくとも含有していることが以下の理由により特に好ましい。

- ① 酸素阻害が少ない。
- ② 硬化収縮が非常に少ない。
- ③ 透明基体への密着性に優れている。

【0027】前記エポキシ系化合物としては、テトラメチレングリコールジグリシジルエーテル、プロピレングリコールジグリシジルエーテル、ネオペンチルグリコールジグリシジルエーテル、ビスフェノールAジグリシジルエーテル等のグリシジルエーテル、2-ヒドロキシ-3-フェノキシプロピルアクリレート、ビスフェノールA-ジエポキシ-アクリル酸付加物等のエポキシエステルや、以下の化学式からなる脂環式エポキシ等のモノマー及びオリゴマーをあげることができる。

【0028】

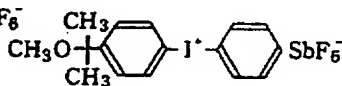
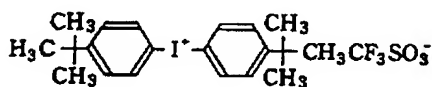
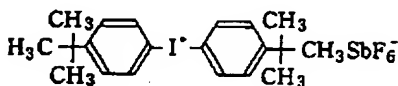
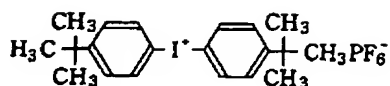
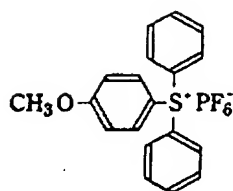
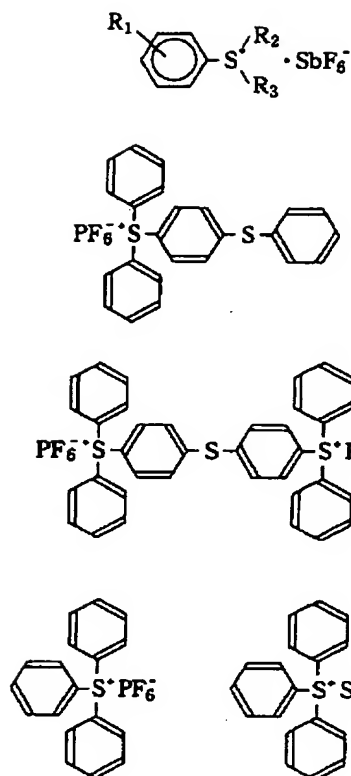
【化1】



【0029】光カチオン重合開始剤としては、以下の化学式からなる化合物をあげることができる。なお、これらの化合物は各単体で用いても良く、複数混合で使用しても良い。

【0030】

【化2】



【0031】光カチオン重合開始剤の配合量は、主剤に対し、0.1～5.0重量%の範囲が望ましい。この配合量は0.1より少なくても、5.0より多くても紫外線硬化は不十分である。

【0032】本発明においては、上記のように放射線硬化型樹脂として紫外線で硬化可能なエポキシ系化合物を用い、重合開始剤として光カチオン重合開始剤を用いることが好ましいが、この場合、粘度、架橋密度、耐熱性、耐薬品性など塗料及び塗工膜の特性をコントロールするためには、紫外線で硬化可能なアクリル系化合物を混合することが好ましい。このようなアクリル系化合物としては、ラウリルアクリレート、エトキシジエチレングリコールアクリレート、メトキシトリエチレングリコールアクリレート、フェノキシエチルアクリレート、テトラヒドロフルフリルアクリレート、イソボルニルアクリレート、2-ヒドロキシエチルアクリレート、2-ヒドロキシプロピルアクリレート、2-ヒドロキシ-3-フェノキシアクリレート等の単官能アクリレート、ネオペンチルグリコールジアクリレート、1,6-ヘキサジオールジアクリレート、トリメチロールプロパンアクリレート、ペンタエリスリトールトリアクリレート、ペンタエリスリトールジアクリレート、ジペンタエリスリトールヘキサアクリレート、トリメチロールプロパンアクリル酸安息香酸エステル、トリメチロールプロパン安息香酸エステル等の多官能アクリレート等のアクリル酸誘導体、2-エチルヘキシルメタクリレート、n-ステアリルメタクリレート、シクロヘキシルメタクリレート、テトラヒドロフルフリルメタクリレート、2-

ヒドロキシエチルアクリレート、2-ヒドロキシブチルメタクリレート等の単官能メタクリレート、1,6-ヘキサジオールジメタクリレート、トリメチロールプロパントリメタクリレート、グリセリンジメタクリレート等の多官能メタクリレート等のメタクリル酸誘導体、グリセリンジメタクリレートヘキサメチレンジイソシアネート、ペンタエリスリトールトリアクリレートヘキサメチレンジイソシアネート等のウレタンアクリレート等のモノマー及びオリゴマーをあげることができる。

【0033】前記放射線硬化型樹脂を使用したハードコート層の硬化に伴う体積収縮率（下記方法より算出）は、20%以下が望ましい。体積収縮率が20%より大きくなると、透明基体がフィルムの場合はカールが著しくなり、また基材がガラス等リジットな材料系の場合はハードコート層の密着性が低下する。

【0034】

【数2】体積収縮率：D = (S - S') / S × 100

S：硬化前の比重

S'：硬化後の比重

（比重はJIS K-7112のB法ピクノメーター法により測定）

【0035】なお、本発明におけるハードコート層には、放射線硬化型樹脂に対し、ハイドロキノン、p-ベンゾキノン、t-ブチルハイドロキノン等の安定化剤（熱重合禁止剤）を添加しても良い。添加量は、放射線硬化型樹脂に対し、0.1～5.0重量%の範囲が好ましい。

【0036】ハードコート層に使用することのできる熱

硬化型樹脂としては、フェノール樹脂、フラン樹脂、キシレン・ホルムアルデヒド樹脂、ケトン・ホルムアルデヒド樹脂、ユリア樹脂、メラミン樹脂、アニリン樹脂、アルキド樹脂、不飽和ポリエステル樹脂、エポキシ樹脂等を挙げることができる。これらは単独もしくは複数混合して使用しても良い。透明基体がプラスチックフィルムである場合は、熱硬化温度を高く設定することができない。特に、PET、TACを使用する場合には、使用する熱硬化樹脂は、100℃以下で硬化することが望ましい。

【0037】ハードコート層に用いられる硬化型樹脂の透明性は高いほど良く、光線透過率(JIS C-6714)としては、透明基体同様、80%以上、好ましくは90%以上が好ましい。反射防止材料の透明性は該硬化型樹脂の屈折率によって影響を受けるが、屈折率は、1.45~1.70の範囲、特に、1.6~1.70の範囲が好ましく、この範囲を越えると反射防止効果が損なわれる。

【0038】ハードコート層にはフィラーを含有させ、ハードコート層表面を粗面化することで、反射防止効果を向上させることができる。ハードコート層を屈折率1.60以上にする場合には、無機系フィラーとして、例えば、ZnO(屈折率 $n=1.90$)、TiO₂($n=2.3\sim2.7$)、CeO₂($n=1.95$)、Sb₂O₅($n=1.71$)、SnO₂、ITO($n=1.95$)、Y₂O₅($n=1.87$)、La₂O₅($n=1.95$)、ZrO₂($n=2.05$)、Al₂O₃($n=1.63$)、HfO₂($n=2.00$)、Ta₂O₅等が挙げられる。

【0039】また、ハードコート層を屈折率1.45~1.60にする場合には、シリカ、炭酸カルシウム、水酸化アルミニウム、水酸化マグネシウム、クレイ、タルク等の無機系白色顔料、アクリル樹脂、ポリスチレン樹脂、ポリエチレン樹脂、エポキシ樹脂、シリコン樹脂、ビーズ等有機系の透明または白色顔料等をあげることができる。特に、球状で給油性を示さないフィラーが好ましく、球状のフィラーを用いることによって、ハードコート層の表面から突出する部分がなだらかになり、油分等の汚れが付着し難くなるとともに付着した汚れを拭き易くなる。

【0040】このようなフィラーの粒子径D(JIS B9921)は、 $0.5\mu\text{m}\leq D\leq 6.0\mu\text{m}$ の範囲のものが60重量%以上、 $6.0\mu\text{m}< D\leq 10.0\mu\text{m}$ の範囲のものが20重量%未満、 $10\mu\text{m}< D\leq 15.0\mu\text{m}$ の範囲のものが5重量%以下、 $15.0\mu\text{m}$ より大きいものが1重量%以下であることが望ましい。さらに、 $15.0\mu\text{m}$ より大きい粒子は、できれば含有されない(0%)ことが好ましく、特に、 $0.5\mu\text{m}\leq D\leq 6.0\mu\text{m}$ の範囲のものが80重量%以上、 $6.0\mu\text{m}< D\leq 10.0\mu\text{m}$ の範囲のものが10重量%未満、1

$0\mu\text{m}< D\leq 15.0\mu\text{m}$ の範囲のものは全く含まないことが好ましい。 $0.5\mu\text{m}\leq D\leq 6.0\mu\text{m}$ の範囲にあるフィラーの重量%と、 $6.0\mu\text{m}< D\leq 10.0\mu\text{m}$ の範囲にあるフィラーの重量%、さらに、 $10\mu\text{m}< D\leq 15.0\mu\text{m}$ の範囲にあるフィラーの重量%が、それぞれ60%未満、20%未満、5%未満の場合は、ディスプレイの反射防止効果が悪くなり、 $6.0\mu\text{m}< D\leq 10.0\mu\text{m}$ の範囲にあるフィラーが20重量%以上もしくは、 $10\mu\text{m}< D\leq 15.0\mu\text{m}$ の範囲にあるフィラーが5重量%の場合は、ディスプレイの画像にギラツキが発生する。フィラーの配合量については、ハードコート層の全固形分比で、0.5~30%の範囲が良い。特に、1~15%の範囲が好ましい。配合量が0.5%以下では、反射防止効果が不充分となり、30%以上では、透明性、画像のコントラストが劣るばかりでなく、耐摩耗性や耐環境性等の耐久性が悪くなる。また、フィラーの屈折率(JIS K-7142によるB法)は、硬化型樹脂と同等であることが好ましい。フィラーの屈折率が硬化型樹脂の屈折率と異なる場合は、フィラーと樹脂界面で光が拡散し、透明性が損なわれる。硬化型樹脂と同等の屈折率を有するフィラーの例としては、有機系のフィラー、特に、架橋アクリルビーズが好適である。

【0041】架橋アクリルビーズとしては、アクリル酸及びそのエステル、メタクリル酸及びそのエステル、アクリルアミド、アクリルニトリル等のアクリル系モノマーと過硫酸等の重合開始剤、エチレングリコールジメタクリレート等の架橋剤を用い、懸濁重合法等により重合して得られる重合体及び共重合体からなる架橋アクリル系ビーズが好適に使用できる。特にアクリル系のモノマーとして、メチルメタクリレートを使用した構成が好ましい。この様にして得られた架橋アクリルビーズは球状で吸油性を示さないことから、ハードコート層に使用した場合、優れた耐汚染性を発現できる。また、架橋アクリルビーズには、塗料の分散性を向上させるために油脂類、シランカップリング剤、金属酸化物等の有機・無機材料による表面改質を行っても良い。

【0042】本発明において、透明基体の片面または両面に、直接或は他の層を介してハードコート層を設ける方法としては、上記で述べた樹脂中に、必要に応じて無機系フィラー、架橋アクリルビーズ等の有機系フィラーや水或は有機溶剤を混合し、これをペイントシェーカー、サンドミル、パールミル、ボールミル、アトライター、ロールミル、高速インペラー分散機、ジェットミル、高速衝撃ミル、超音波分散機等によって分散して塗料またはインキとし、これをエアドクターコーティング、ブレードコーティング、ナイフコーティング、リバースコーティング、トランスファロールコーティング、グラビアロールコーティング、キスコーティング、キャストコーティング、スプレーコーティング、スロットオ

リフィスコーティング、カレンダーコーティング、電着コーティング、ディップコーティング、ダイコーティング等のコーティングやフレキソ印刷等の凸版印刷、ダイレクトグラビア印刷、オフセットグラビア印刷等の凹版印刷、オフセット印刷等の平版印刷、スクリーン印刷等の孔版印刷等の印刷手法により透明基体の片面もしくは両面上に単層もしくは多層に分けて設け、溶媒を含んでいる場合は、熱乾燥工程を経て、放射線（紫外線の場合、光重合開始剤が必要）照射等により塗工層もしくは印刷層を硬化させることによって得る方法が挙げられる。なお、放射線が電子線による場合は、コックロフトワルトン型、バンデグラフ型、共振変圧型、絶縁コア変圧器型、直線型、ダイナミترون型、高周波型等の各種電子線加速器から放出される50～1000KeVのエネルギーを有する電子線等が使用され、紫外線の場合は、超高圧水銀灯、高圧水銀灯、低圧水銀灯、カーボンアーク、キセノンアーク、メタルハライドランプ等の光線から発する紫外線等が利用できる。

【0043】塗料、インクの塗工適性または印刷適性を向上させるために、必要に応じ、シリコンオイル等のレベリング剤、ポリエチレンワックス、カルナバワックス、高級アルコール、ビスアマイド、高級脂肪酸等の油脂、イソシアネート等の硬化剤、炭酸カルシウムやシリカゾル、合成雲母等0.1μm以下の超微粒子等の添加剤を適宜使用することができる。また、ディスプレイ表面に静電的に付着するホコリ等の汚れを防止するために帯電防止剤を添加しても良い。帯電防止剤は、上述の帯電防止層で説明した材料がそのまま適用できる。

【0044】ハードコート層の厚さは1.0～10.0μmの範囲が、好ましくは1～5μmの範囲が良い。ハードコート層が1.0μmより薄い場合は、ハードコート層の耐磨耗性が劣化したり、紫外線硬化型樹脂を使用した場合など、酸素阻害により硬化不良を起こす。10μmより厚い場合は、樹脂の硬化収縮によりカールが発生したり、ハードコート層にマイクロクラックが発生したり、さらに、透明基体との密着性が低下したりする。

【0045】C. 低屈折率層

本発明の低屈折率層の屈折率は1.20～1.45であることが好ましい。これらの特徴を有する材料としては、例えばLiF（屈折率 $n=1.4$ ）、 MgF_2 （ $n=1.4$ ）、 $3NaF \cdot AlF_3$ （ $n=1.4$ ）、 AlF_3 （ $n=1.4$ ）、 Na_3AlF_6 （ $n=1.33$ ）等の無機材料を微粒子化し、アクリル系樹脂やエポキシ系樹脂等に含有させた無機系低反射材料、フッ素系、シリコン系の有機化合物、熱可塑性樹脂、熱硬化型樹脂、放射線硬化型樹脂等の有機低反射材料を挙げることができる。その中で、特に、含フッ素系のフッ素材料が汚れ防止の点において好ましい。また、低屈折率層は、臨界表面張力が20dyne/cm以下であることが望ましい。臨界表面張力が20dyne/cmより大きい場合

は、低屈折率層に付着した汚れが取れにくくなる。

【0046】前記含フッ素材料としては、有機溶剤に溶解し、その取り扱いが容易であるフッ化ビニリデン系共重合体や、フルオロオレフィン/炭化水素オレフィン共重合体、含フッ素エポキシ樹脂、含フッ素エポキシアクリレート、含フッ素シリコン、含フッ素アルコキシシラン、さらに、TEFRON AF1600（デュボン社製、屈折率 $n=1.30$ ）、CYTOP（旭硝子（株）社製、 $n=1.34$ ）、17FM（三菱レーヨン（株）社製、 $n=1.35$ ）、オプスターJN-7212（日本合成ゴム（株）社製、 $n=1.40$ ）、LR201（日産化学工業（株）社製、 $n=1.38$ ）等を挙げることができる。これらは単独でも複数組み合わせで使用することも可能である。

【0047】また、2-（パーフルオロデシル）エチルメタクリレート、2-（パーフロロ-7-メチルオクチル）エチルメタクリレート、3-（パーフロロ-7-メチルオクチル）-2-ヒドロキシプロピルメタクリレート、2-（パーフロロ-9-メチルデシル）エチルメタクリレート、3-（パーフロロ-8-メチルデシル）2-ヒドロキシプロピルメタクリレート等の含フッ素メタクリレート、3-パーフロロオクチル-2-ヒドロキシプロピルアクリレート、2-（パーフルオロデシル）エチルアクリレート、2-（パーフルオロ-9-メチルデシル）エチルアクリレート等の含フッ素アクリレート、3-パーフルオロデシル1, 2-エポキシプロパン、3-（パーフロロ-9-メチルデシル）-1, 2-エポキシプロパン等のエポキシサイド、エポキシアクリレート等の放射線硬化型の含フッ素モノマー、オリゴマー、プレポリマー等を挙げることができる。これらは単独もしくは複数種類混合して使用することも可能である。

【0048】さらに、5～30nmのシリカ超微粒子を水もしくは有機溶剤に分散したゾルとフッ素系の皮膜形成剤を混合した低反射材料を使用することもできる。5～30nmのシリカ超微粒子を水もしくは有機溶剤に分散したゾルは、ケイ酸アルカリ塩中のアルカリ金属イオンをイオン交換等で脱アルカリする方法や、ケイ酸アルカリ塩を鉱酸で中和する方法等で知られた活性ケイ酸を縮合して得られる公知のシリカゾル、アルコキシシランを有機溶媒中で塩基性触媒の存在下に加水分解と縮合することにより得られる公知のシリカゾル、さらには上記の水性シリカゾル中の水を蒸留法等により有機溶剤に置換することにより得られる有機溶剤系のシリカゾル（オルガノシリカゾル）が用いられる。これらのシリカゾルは水系及び有機溶剤系のどちらでも使用することができる。有機溶剤系シリカゾルの製造に際し、完全に水を有機溶剤に置換する必要はない。前記シリカゾルはSiO₂として0.5～50重量%濃度の固形分を含有する。シリカゾル中のシリカ超微粒子の構造は球状、針状、板状等様々なものが使用可能である。

【0049】また、被膜形成剤としては、アルコキシシラン、金属アルコキシドや金属塩の加水分解物や、ポリシロキサンをフッ素変性したものなどを用いることができる。特に、上記のような被膜形成剤を用いると低屈折率層の臨界面張力を確実に 20 dyne/cm 以下にするためには、好適であり、特に、フッ素化合物が好適である。本発明の低屈折率層は、上記で述べた材料を例えば溶剤で希釈し、スピンコーター、ロールコーター、印刷等の方法でハードコート層に設けて乾燥後、熱や放射線（紫外線の場合は上述の光重合開始剤を使用する）等により硬化させることによって得ることができる。放射線硬化型の含フッ素モノマー、オリゴマー、プレポリマーは耐汚染性には優れているが、濡れ性が悪いため、組成によってはハードコート層上で低屈折率層をはじくという問題や、低屈折率層がハードコート層から剥がれるという問題が生じるおそれがあるため、ハードコート層に使用する前述の放射線硬化型樹脂として説明した、アクリロイル系、メタアクリロイル系、アクリロイルオキシ基、メタアクリロイルオキシ基等重合性不飽和結合を有するモノマー、オリゴマー、プレポリマーを適宜混合し、使用することが望ましい。なお、透明基体が熱によるダメージを受けやすいPET、TAC等のプラスチックフィルムを使用する場合は、これら低屈折率層の材料としては、放射線硬化型樹脂を選択することが好ましい。

【0050】低屈折率層の塗料、インクの塗工適性または印刷適性を向上させるために、必要に応じ、ハードコート層同様、シリコンオイル等のレベリング剤、ポリエチレンワックス、カルナバワックス、高級アルコール、ビスアマイド、高級脂肪酸等の油脂、イソシアネート等の硬化剤、炭酸カルシウムやシリカゾル、合成雲母等 $0.05\text{ }\mu\text{m}$ 以下の超微粒子等の添加剤を適宜使用することができる。また、ディスプレイ表面に静電的に付着するホコリ等の汚れを防止するために帯電防止剤を低屈折率層に添加したり、もしくは低屈折率層上に静電防止層を設けても良い。帯電防止剤は、前述の帯電防止層で説明した材料がそのまま適用できる。

【0051】低屈折率層の厚さについては、前記した数1に示す計算式で算出することができる。式(1)によれば、光の反射を 100% 防止するためには、ハードコート層の屈折率が低屈折率層の屈折率の2乗になるようにハードコート層の材料を選択すればよいことが分かる。前記式(2)では(1)式で選択した低屈折率層の屈折率と、光の波長から低屈折率層の反射防止膜としての最適な厚さが計算される。たとえば、ハードコート層、低屈折率層の屈折率をそれぞれ 1.50 、 1.38 、光の波長を 550 nm （視感度の基準）とし、これらの値を前記(2)式に代入すると、低屈折率層の厚さは $0.1\text{ }\mu\text{m}$ 前後の光学膜厚、好ましくは $0.1\pm0.01\text{ }\mu\text{m}$ の範囲が最適であると計算される。

【0052】このようにして作製した本発明の反射防止材料のJIS K7105によるHAZE値は、 $3\sim30$ の範囲、特に好ましくは $5\sim15$ の範囲であることが好ましい。この場合、この値が 3 未満では、光拡散の効果が少なくそれ程大きな反射防止効果を得ることができない。一方、HAZE値が 30 を超えると、画像コントラストが悪く視認性不良となり、ディスプレイとしての機能低下を招くことから好ましくない。なお、HAZE値とは、曇価を意味するものであり、積分球式光線透過率測定装置を用いて、拡散透過率(Hd%)と全光線透過率(Ht%)を測定し、下記式にて算出する。

【0053】

【数3】 $\text{HAZE値} = \text{Hd} / \text{Ht} \times 100$

【0054】(2) 偏光フィルムの内容

上記構成の反射防止材料の透明基体のハードコート層および低屈折率層が設けられていない他方の面に、偏光基体を介して保護材を積層することにより、偏光フィルムを構成することができる。以下、本発明の偏光フィルムの詳細について説明する。

【0055】A. 偏光基体

偏光基体は、透明フィルムを形成できる材料で構成され、具体的には、ポリビニルアルコール、ポリビニレン等が使用できる。そして、このような材料を延伸させてフィルム化することにより偏光基体を得ることができる。例えば、2色性素子として沃素または染料を吸着させたポリビニルアルコールを一軸延伸して得られたポリビニルアルコール(PVA)フィルムを用いることが好ましい。偏光基体は $10\sim80\text{ }\mu\text{m}$ の厚みを有するものが使用される。具体的には、PVAフィルムを一軸方向に $3\sim4$ 倍程度延伸し、高次の沃素イオン中に延伸したPVAフィルムを含浸させることにより偏光基体を得ることができる。

【0056】B. 保護材

上記で得られるPVAフィルムは、強度等が不足しているため裂け易く、湿度変化に対して収縮率が大きいという欠点を有していることから、偏光基体の片面に保護材が積層される。また、反射防止材料の透明基体も偏光基体の他方の面に貼り合わせられて保護材と同じ機能を奏する。保護材及び透明基体は、偏光基体の両面に、ポリエステル系接着剤、ポリアクリル系接着剤、ポリウレタン系接着剤、ポリ酢酸ビニル系接着剤等により接着される。

【0057】保護材としては、透明な高分子化合物のフィルム、例えば、トリアセチルセルロース等のセルロース系フィルム、ポリエステルフィルム、ポリカーボネートフィルム等が使用される。その中でも特にトリアセチルセルロースが好ましい。該フィルムの厚さは $10\sim2000\text{ }\mu\text{m}$ が好ましい。また、これらのフィルムには特にほう酸等のゲル化剤を使用したり、熱処理やホルマール化を行うことによって、フィルムの耐水性を向上させ

ることが好ましい。また、偏光基体との密着性を向上させるために、偏光基体との接着面の表面エネルギーが50 dyne/cm以上になるように、けん化処理やコロナ処理等の表面処理を行うことが好ましい。

【0058】以下図面を用いて、本発明の反射防止材料と偏光フィルムをさらに詳細に説明する。図1は、本発明の反射防止材料の構成を示す概略断面図であり、反射防止材料10は、透明基体11の片面上にハードコート層12を有する構成である。なお、ハードコート層12の表面には低屈折率層が形成されているが、低屈折率層は極めて薄いために図示を省略している（以下においても同じ）。図2は、本発明の偏光フィルム20の構成を示す概略断面図であり、偏光基体24の片面に、透明基体21とハードコート層22とを有する反射防止材料23が設けられ、偏光基体24の他の面に保護材25が設けられていることを示している。

【0059】図3は本発明の反射防止材料により反射防止性を改善した液晶表示体30の構成を示している。この液晶表示体30は、上面の液晶パネル31と下面の導光板装置(EL)やランプ等の背面光源32とを積層して形成されている。液晶パネル31には、例えば、ツイステッドネマチック(TN)液晶セルなどが使用可能である。

【0060】TN液晶セルは、所望のパターンからなる透明電極付きの2枚のガラス基板33、34の透明電極面33'、及び34'上に、ポリイミドの溶液を塗布して配向膜を形成し、これをラビング操作により配向させ、その後、このガラス基板33、34間にネマチック液晶35を注入し、ガラス基板33、34周辺部をエポキシ樹脂等で封着することにより形成される。このネマチック液晶は、配向膜の作用により90°捻れ配向する。このTN液晶セルの2枚のガラス基板の背面光源とは反対側には、図2に示されるハードコート層22を有する反射防止材料23と保護材25とで偏光基体24の両面を保護された偏光フィルム36を、また、その背面光源側には、ハードコート層のない偏光フィルム37を、偏光角度が互いに90°捻れるように貼ることで液晶パネル31が形成される。

【0061】上記TN液晶パネル31の透明電極に駆動信号を印加すると信号が印加された電極間には電界が発生する。その際、液晶分子の持つ電子的異方性により、液晶分子の長軸が電界方向と平行になるため、液晶分子による光の旋光性が失われることとなり、その結果、液*

[分散液の配合]

- ・ATO
- ・MEK
- ・分散剤

(商品名:M1002B 綜研化学社製)

【0065】

[ベース塗料の配合]

*晶パネルには光が透過しない状態となる。画像の表示はこの時の光透過の差に基づくコントラストにより視覚情報として認識される。上記液晶表示体30においては、液晶パネル31に透過させ、液晶パネル31の光の透過する部分と透過しない部分にコントラストを持たせることにより画像表示を可能とするものである。

【0062】図4は、本発明の反射防止材料10を使用した他の液晶表示体の構成を示す断面図である。図4において、液晶パネル41は、2枚のガラス基板43、44及びその間に介在するネマチック液晶45と、ガラス基板43、44の外側に位置するハードコート層を有しない上部の偏光フィルム46、ハードコート層を有しない下部の偏光フィルム47及び該上部の偏光フィルム46の上に積層された反射防止材料10より構成されている。また、液晶表示体40は、液晶パネル41とその下面に位置する背面光源32を積層して形成されている。

【0063】

【実施例】本発明を実施例によって説明する。尚、「部」は「重量部」を意味するものとする。＜実施例1＞まず、粒径3μmのATO(アンチモンティンオキサイド)とメチルエチルケトンの混合物をサンドミルにて30分間分散することによって得られた分散液と、下記配合からなるベース塗料をディスパーにて15分間攪拌、混合した塗料を、膜厚80μm、透過率92%、屈折率1.65からなる透明基体であるポリエチレンテレフタレート(商品名:メリネックス705 デュボン社製)の片面上に、リバースコーティング方式にて塗布し、100℃で2分間乾燥後、UVランプ出力120w/cmの集光型高圧水銀灯1灯を用いて、照射距離(ランプ中心から塗工面までの距離)10cm、処理速度(塗工基体側のUVランプに対する速度)5m/分でUV照射を行い、塗工膜を硬化させた。このようにして、厚さ5μm、屈折率1.60のハードコート層を形成した。その後、含フッ素シリカゾルLR201(全固形分濃度:4%、溶剤:エタノール/ブチルセロソルブ=50/50、日産化学工業(株)社製)を前記ハードコート層上にスピンコーティングにより塗布し、100℃で1分間乾燥後、120℃で6時間熱キュアし、厚さ0.1μm、屈折率1.38の低屈折率層を形成し、HAZE値12.0、反射率0.5%の本発明の反射防止材料を得た。

【0064】

5部
200部
5部

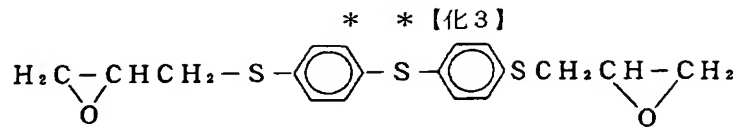
19

・高屈折率材料

20

60部

【0066】



【0067】

・ウレタンアクリレート

(商品名: UA510H 共栄化学社製)

35部

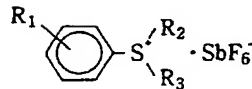
・光カチオン重合開始剤

5部

【0068】

10

【化4】



・イソプロピルアルコール

100部

【0069】＜実施例2＞ハードコート層の分散液とベース塗料を下記に変更した以外は実施例1と同様にし

※ハードコート層を有する本発明の反射防止材料を得た。

【0070】

て、厚さ7μm、HAZE値6.0、反射率0.8%の※

[分散液の配合]

・架橋アクリルビーズ

5部

(商品名: MX300 粒径3.0μm±0.5 綜研化学社製)

・トルエン

205部

【0071】

[ベース塗料の配合]

・高屈折率材料

テトラプロモビスフェノールAジエトキシ化ジアクリレート

70部

(商品名: SK640 日本化薬社製)

・エポキシ系化合物

30部

(商品名: サイラキュアUVR-6110 ユニオンカーバイド社製)

・光カチオン重合開始剤

3部

(商品名: サイラキュアUVI-6990 ユニオンカーバイド社製)

・イソプロピルアルコール

5部

【0072】(比較例1) 分散液とベース塗料を下記に

★m、HAZE値11.0、反射率2.0%のハードコー

変更した以外は実施例1と同様にして、厚さ3.6μ ★

ト層を有する比較用の反射防止材料を得た。

[分散液の配合]

・架橋アクリルビーズ

5部

(商品名: MX300 粒径1.5μm 0.5 綜研化学社製)

・トルエン

200部

[ベース塗料の配合]

・アクリル系化合物

1,6ヘキサンジオールジメタクリレート

45部

ペンタエリスリトールトリアクリレートヘキサメチレンジイソシアネート

45部

・光重合開始剤

5部

(商品名: イルガキュア 184 チバガイギー社製)

・イソプロピルアルコール

10部

【0073】(比較例2) 分散液におけるATOを以下

・シリカ顔料

に変更した以外は実施例1と同様にして、厚さ3.0μ

(商品名: サイリシア#456 富士シリシア化学社製

m、HAZE値29.0、反射率1.5%のハードコー

粒径: 0.5~6.0μmの範囲のもの 50%

ト層を有する比較用の反射防止材料を得た。

50 粒径: 6.0μmを越えるもの

40%)

【0074】（比較例3）厚さ80 μ m、透過率92%のトリアセチルセルロースをそのまま比較用の反射防止材料とした。

【0075】（比較例4）低屈折率層を設けない以外は実施例1と同様にして、比較用の反射防止材料とした。

【0076】実施例1～2、比較例1～4で得られた反射防止材料10を用い、防眩性、画像ギラツキ、反射率、耐磨耗性、耐薬品性、耐汚染性を下記方法により測定、評価した。前記反射防止材料10を用い、図2に示される構成の偏光フィルム20を作製した。次いで、前記偏光フィルム20を図3に示されるようにガラス基盤33に貼り付け、液晶表示体30を得た。なお、これらの各液晶表示体30の画像サイズは例えば10.4インチとし、解像度は例えば800 \times 600ドットとして、下記方法によって、画像コントラストの評価を行った。

【0077】防眩性はスガ試験機社製の写像性測定器ICM-1DP（JIS K 7105）を使用、透過モードで、光学くし幅2mmで測定した。測定値が小さいほど防眩性が高い。ここでは、50%未満を○、50%以上、70%未満を△、70%以上を×として評価した。画像ギラツキは防眩性の評価と同じ測定器を使用し、透過モードで、光学くし幅0.125mmで測定した。測定値が大きいほど画像ギラツキが少ない。ここでは、10%以上を○、5%以上、10%未満を△、5%未満を×とした。反射率は分光光度計UV3100（島津製作所社製）を使用し、波長領域400～700nmの範囲の5°の正反射を測定、JIS Z 8701に従い、視感度補正したY値で表した。なお、測定は非測定面を黒マジックで完全に黒塗りし、行った。

【0078】耐磨耗性は日本スチールウール社製のスチールウール#0000を板紙耐磨耗試験機（熊谷理機工業社製）に取り付け、反射防止材料の低屈折率層面を荷*

*重200gにて50回往復させる。その後、その部分のHAZE値の変化 δH （下記計算に基づく）を東洋精機社製HAZEメーターで測定した。測定値が大きいほど耐磨耗性が悪い。なお、HAZE値の測定は反射防止材料単体で行った。HAZE値変化 δH =試験後のHAZE値-試験前のHAZE値耐薬品性は、低屈折率層面をイソプロピルアルコールを含ませた綿棒（ジョンソン社製）で、50往復擦った後に、ハードコート層に剥がれ等著しい変化があった場合を×、変化がない場合を○、その中間を△として評価した。

【0079】耐汚染性は、低屈折率層面に菜種油をスプイトで1滴、滴下した後、滴下した菜種油をリグロインを含ませた旭化成社製のベンコットで20往復ラビングする。さらにその後、拭き取った面のSEM写真を撮影、面の傷やベンコットの繊維の付着の有無を確認した。ハードコート層に傷やベンコットの繊維の付着が顕著に認められる場合を×、全く変化がない場合を○、その中間を△とした。画面コントラストはJIS C 7072 1988に於ける液晶表示パネルのコントラスト比（CR）測定方法に準拠し、評価した。画像コントラストの評価における光源101-液晶パネル-測光器104の位置関係を図4に示す。この場合、光源101と液晶パネル2との間は例えば1cm、液晶パネル2と測光器との間は例えば50cm、測光器の開口角は例えば5°に設定した。なお、光源には5WのELを使用し、測光器にはミノルタカメラ社製のLS-100を使用した。CRが4以上の場合を◎、同、3以上、4未満の場合を○、同、2以上～3未満の場合を△、同、2未満を×とした。以上の評価結果を表1に示す。

【0080】

【表1】

サンプル	*屈折率の差	HAZE値	反射率	コントラスト	ギラツキ	防眩性	耐磨耗性	耐薬品性	耐汚染性
実施例1	0.05	12.0	0.5	○	○	○	1.2	○	○
実施例2	0.03	6.0	0.8	○	○	○	2.4	○	○
比較例1	0.12	11.0	2.0	△	○	○	1.3	○	○
比較例2	0.14	29.0	1.5	×	△	○	5.6	○	×
比較例3	—	0.3	4.0	○	○	×	43.2	×	×
比較例4	0.05	14.0	6.0	△	○	○	3.2	○	×

*：透明基体とハードコート層の屈折率の差を示す。

【0081】表1の結果から明らかなように、本発明の反射防止材料はいずれも反射率が小さく良好な特性が得られているのに対し、比較例1～2の反射防止材料では、ハードコート層の屈折率が低いために反射率が高い。また、比較例4では、ハードコート層の屈折率が高いが、低屈折率層がないために反射率が高く、また、比

較例3では透明基体に表面改質処理が行われていないために反射率が高く防眩性に劣るだけでなく、耐久性にも問題を有するものである。

【0082】

【発明の効果】以上説明したように本発明によれば、ディスプレイへの太陽光及び蛍光灯等の外部光の映り込み

を防止することにより優れた反射防止性を発揮し、画像コントラストを低下させることなく、ギラツキ等のない鮮明な画像を得ることができるとともに、光学的に安定で優れた耐摩耗性、耐薬品性を示し、かつ、優れた耐汚染性を示す反射防止材料と偏光フィルムを得ることができる。

【図面の簡単な説明】

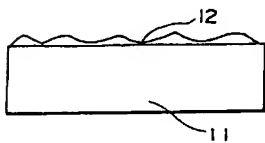
【図 1】 本発明の反射防止材料の構成を示す概略断面図である。

【図 2】 本発明の反射防止材料を使用した偏光フィルムの構成を示す概略断面図である。

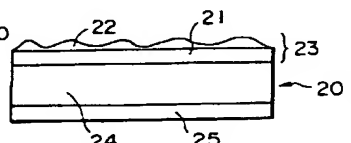
【図 3】 反射防止材料を使用した偏光フィルムを具備する液晶表示体の構成を示す概略断面図である。

【図 4】 反射防止材料を使用した偏光フィルムを具備する他の液晶表示体の構成を示す概略断面図である。

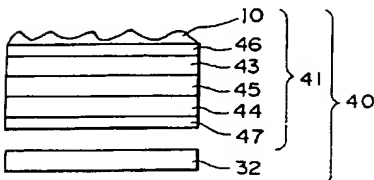
【図 1】



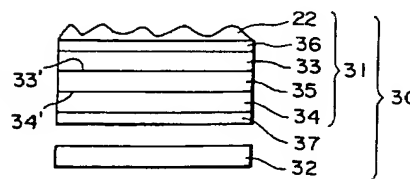
【図 2】



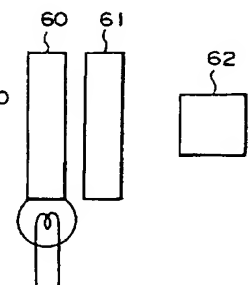
【図 4】



【図 3】



【図 5】



【手続補正書】

【提出日】平成 1 0 年 6 月 1 0 日

【手続補正 1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】特許請求の範囲

【補正方法】変更

【補正内容】

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 透明基体の片面もしくは両面に、直接または他の層を介してハードコート層を設け、このハードコート層の表面にハードコート層の屈折率よりも低い屈折率を有する低屈折率層を設けた反射防止材料において、上記ハードコート層は、硫黄、芳香族化合物またはハロゲンを含む樹脂の少なくともいずれか一種を含有し、かつ、上記透明基体およびハードコート層の屈折率の差は 0. 1 以内であることを特徴とする反射防止材料。

【請求項 2】 前記透明基体およびハードコート層の屈

折率は 1. 6 ~ 1. 7 であり、かつ、上記透明基体のハードコート層側の面は、表面改質処理が施されていることを特徴とする反射防止材料。

【請求項 3】 前記低屈折率層の屈折率が 1. 2 0 ~ 1. 4 5 であり、かつ、前記透明基体がポリエチレンテレフタレートであることを特徴とする請求項 1 または 2 に記載の反射防止材料。

【請求項 4】 前記ハードコート層がフィラーを含有することを特徴とする請求項 1 ~ 3 のいずれかに記載の反射防止材料。

【請求項 5】 前記フィラーの粒径 D は、 $0. 5 \mu m \leq D \leq 6. 0 \mu m$ の範囲の粒子が 6 0 重量%以上、 $6. 0 \mu m < D \leq 1 0. 0 \mu m$ の範囲の粒子が 2 0 重量%未満、 $1 0. 0 \mu m < D \leq 1 5. 0 \mu m$ の範囲の粒子が 5 重量%以下、さらに、 $1 5 \mu m$ より大きい粒子が 1. 0 重量%以下である粒度分布を有することを特徴とする請求

項 4 に記載の反射防止材料。

【請求項 6】 請求項 1 ～ 5 のいずれかに記載の反射防止材料の前記透明基体の前記ハードコート層および前記

低屈折率層が設けられていない他方の面に、偏光基体を介して保護材を積層したことを特徴とする偏光フィルム。

フロントページの続き

(51) Int. Cl. ⁶

識別記号

H 0 1 J 5/16

F I

H 0 1 J 5/16

(72) 発明者 山本 智久

静岡県静岡市用宗巴町 3 番 1 号 株式会社
巴川製紙所情報メディア事業部内

(72) 発明者 作本 征則

静岡県静岡市用宗巴町 3 番 1 号 株式会社
巴川製紙所情報メディア事業部内